

## 国際観光コンベンションフォーラム 2016 in 岡山

## 全体総括

白井事務所 代表

白井 冬彦



私から昨日、今日2日間の総括と言いますかレビューと講評という形でまとめさせていただきます。この役割は本来、日本コンベンション研究会会長の石森が続けてきたのですが、所用があって出席できず、突然私に回ってきました。

最初に今回、第9回目となる国際観光コンベンションフォーラムは過去最多164名の参加者ということで、まずお礼を申し上げます。プログラムの最初として、昨年10月に新設されましたスポーツ庁参事官の仙台光仁様から「スポーツが果たす役割」という題で特別講演を頂きました。仙台様のメッセージとしては、いわゆるスポーツには、人を動かす力がある。その力を活かしてどうやって地方を元気にしていくかというのが役割ということ。キャッチフレーズ的に言うと「スポーツだけから」「スポーツ+ $\alpha$ 」もしくは「スポーツ $\times\alpha$ 」を目指して新設のスポーツ庁ですが様々な取り組みをやっていきますという紹介がありました。そのいくつかの活動の中で地方でのスポーツ・コミッションの創設並びに支援をどうしていくかということも1つのテーマとして報告されました。また、現在新しいスポーツ庁の基本計画を作成中ですので、各地域の方々からのいろんなインプットもお願いしますという言葉を受

けたと思っています。

続きまして次のセッションとしては基調講演の岡山大学の高岡敦史先生から「観光コンベンションがリードする地方創生—スポーツ・コンベンションが生む3つのエネルギー」というタイトルで講演を頂きました。これまで交流人口の増大と経済効果に着目してのスポーツ、もしくはスポーツ・コンベンションという取り上げ方、また、そういう期待によっていろんな所で話題にはなっているのですが、先生によりますとそれだけではだめなのではないかと。もう少し公益性という観点からスポーツ並びにスポーツ・コンベンションを見直すべきではないかという提言がありました。それを受けて先生のほうではスポーツ・コンベンションが持つ3つの力に着目すべきであるということで、私も初めて聞いた言葉ですが、その地方、土地への愛ということで「トポフィリア」と、2つ目はスポーツが持つ共振・感動の物語の共有の可能性。それからスポーツ参加者だけではなく、地域住民の方がそういうイベントに当事者として参画できる可能性の部分。この3つに注目しながら、その効果をさらに高める方法論としての地方住民の方々が企画から運営にまで参加して頂ける仕組みを作らなければ

ならないだろうということ。さらにスポーツ・イベントの参加者と住民との交流の仕掛けづくり。3つ目としてはそれらを本当に有機的に企画・運営していく、デザインしていくための元々のまちづくり系の活動をやる団体とスポーツ・コミッション、さらには観光を含めたDMOとの有機的な結びつきのような形での組織の在り方というのが必要ではないかという基調講演を頂きました。

その後、分科会1、2と分かれまして、私は分科会1のコーディネーターをやらせて頂きました。ここでは基調講演の高岡先生の話を受けてスポーツ・コンベンションが地域へもたらす効果をどう高めるかという趣旨で分科会を進めました。最初に岡山スポーツ・プロモーション研究会から多くの方に来ていただいたので、そちらの代表者の方からこの組織がどういう活動をどのように行っているのかという話をお聞きして、話をスタートさせました。

会場とのやり取りの中でほかの地域の話もいくつかご紹介頂きました。例えば新潟市の話、大阪の堺市の話、札幌でのスポーツもしくはスポーツ・コンベンションの活動に関して何が起きているかという話を聞きました。堺市におけるコンベンションの約8割はスポーツ関連のイベントということです。その8割の内のまた8割がサッカー関連のイベントという話を伺いました。その原点になっているのはJ-GREENというサッカートレーニングの施設があるということ。但し残念ながら高岡先生が言われたような、そういう活動に対する住民の参画ないしは住民が自分たちの地域でそうした事が起きている事への関心の度合いがそこまで踏み込めていない。それが今後の課題という報告がありました。

それと合わせて札幌ではこの3月末にスポーツ・コミッションが設立されると。但しこの設立に際してはこれまでのコンベンション・ビューローとの役割分担をどうしていくのかという議論がずっと続いた中で、今回そこから出る形でのコミッションの新設、特に2026年の2回目の冬のオリンピックに向けての誘致活動もやらなければならないという形の中で、その役割分担、共同作業の分を今後どうしていくか、課題の説明もありました。

そうした新しい活動をする中の組織をどうしていくかということで、岡山の事例を元にどういう体制に持っていったらよいかの話で、1つ面白い指摘としては、岡山の場合は先ほどのスポーツ振興研究会の約70名の方が非常にゆるやかな組織づくりをされていると。あまりフォーマルな組織ではなく、一種の勝手連的な形の集まりで、予算もなければ執行権限も何もない中でいろいろな方々の集まりであって、自由に意見を言う中で、そこで出てきた意見をしかるべき組織に投げかける。そういうゆるやかな組織の作り方でもいいのではないかと

というのが分科会1のまとめになるとと思います。

並行して行われました分科会2。これには私は出ておりませんので、事務局のメモを元に報告させていただきます。スピーカーとしては「とまれる」株式会社の三口聡之介さん、コーディネーターを立教大学の玉井和博先生が務められました。テーマは「インバウンド急増対策—民泊はどう進むのか」で、本当にインバウンドが激増し、宿泊施設が不足している中で民泊の在り方が議論された分科会でした。玉井先生からは我が国の宿泊施設の現状と今後の動向が述べられました。その中で民泊の形態としては、いわゆるホームステイ型と投資型の2タイプがあること。さらには民泊を進めていかなければならない流れの中で、東京都大田区が民泊特区の認定を受けたことの説明がありました。

三口さんからは民間事業者としてどういう民泊の取り組みをしているかの報告がされました。世界で約8000万人、日本でも約3万件に達する民泊が行われており、三口さんの「とまれる」社では大田区が民泊特区認定を受けた流れの中で、いわゆる闇民泊、多少ともブラックの要素がある民泊ではない、合法民泊をいかに広げていくか活動されている報告がありました。ただ、現実には民泊が近隣社会とのトラブルや、様々な宿泊客が起し得るリスク、さらには投資型民泊が持つ課題について、これまでの経験を踏まえて対策についても説明がありました。

まとめとしては、この流れは止まらないというだけではなく、スマートフォンの利用など新しいアプリの開発も含めてさらに技術革新が進み、いろんな対応が起こって来るだろうと。そういう大きな流れがさらにさらに起こっていく中で、地域社会においてもこれを受け入れて様々な対応を柔軟に考えていく必要があるであろうということでした。

さらに昨日は意見交換会が行われ、100名を超える参加者があり、非常に活発に意見が出され有意義な集まりだったと思います。また、岡山に来た者としては岡山が持っている可能性や熱さみたいなものを肌で感じる機会となりました。

今日はそれを受けてメインのテーマがパネルディスカッションですが、その前にNTTの濱村さんからスポーツ分野におけるICTの利活用ということで、大会前・中・後の映像・情報の配信、データの活用についてご紹介がありました。これはスポーツに限らずMICE全般に関するICTの活用ということで、いろいろと我々サイドも考えていかなければならないことがあるかなということでタイムリーな情報提供だったと思います。

続けて本日のメインイベントとしてのパネルディスカッションが「MICE施設の現状と展望」のテーマのもと行われました。

JTB 総研の太田正隆さんがコーディネーターを務められ、パネリストはパシフィコ横浜の佐藤利幸さん、森ビル株式会社の坂本和也さん、長崎市経済局文化観光部の牧島昌博さんをお願いいたしました。

最初に太田さんから 1990 年代を中心に各地で作られた施設が 20 年、25 年、30 年という年限を迎えてそろそろ老朽化の問題を抱え、今後どうなっていくのかという説明がありました。それに合わせて各地域での増改築、さらに新しい企画としての新築のある地域の紹介もありました。そういう状況の中で各パネリストの活動報告があり、佐藤さんからは横浜のみなどみらいにおける MICE 施設の現状ということで、稼働率が限界に近付きつつあるという中で、現施設の約 1.5 倍の新しい施設の紹介がありました。また、施設整備と運営に関する二段構えの PFI の形、コンセッション方式による運営の紹介もありました。

坂本さんからは一般的に MICE 施設は公的性格を持つものが多い中、民間会社として MICE というテーマにどう取り組んでいるかということで、同社の六本木ヒルズのアカデミーヒルズや新しい虎ノ門ヒルズの具体的事例が紹介されました。牧島さんからは長崎市が 3 年前から MICE のテーマで計画を練ってきた部分が今どういう状況か説明があり、用地取得が済んでいることや施設の会場、運営を今後どうしていくかについても紹介されました。テーマとしてはいわゆる箱物としての MICE 施設の建設だけでなく、それをどう運営していくか、さらにまちおこし、まちづくりのツールないしは舞台としての MICE の話、これまでの MICE 施設で考えられていた以上のハード並びにソフト両方への期待、要求度はさらに複雑で難しくなるということを感じさせられました。

私個人としてはいくつか気になるキーワードがありました。例えば「新結合の場」という言葉が出てきて、非常にうれしく思いました。いわゆる地域のブランディングのツールとしての MICE とインバウンド話もあったと思います。MICE というのは経済効果だけではなく、文化的、社会的資本としての役割も持ち、別な言い方をすると「社会インフラ」「産業インフラ」としての MICE の役割みたいなものも自覚しなければならないだろうと。それらを自覚すればするほど MICE の運営というのは地域にとっては地域の総合力の勝負ではないかなという印象を持ちました。地域にいろいろおられる MICE 関係者だけでなく住民の方、民間事業者の方、それからもろもろの地域のステークホルダーの方がそのまちをどうしていくのか、さらに MICE の施設、機能がどういう役割を果たすのか、という形での合意形成、さらにその方向に向けての地域での総合的な取り組みが出来るか出来ないかというのが多分キーになってくるのかなというのが私の印象です。

ということで、全てのプログラムを終えた上での総合的なま

とめ、並びに総括ということで次のようにまとめました。

もう当たり前で、皆さんからは取って報告がなかったのですが、少子高齢化という、もう避けて通れない現実の非常に重たい命題がある中で、実は我々が関わっている MICE、インバウンドのキーワードの中で考えると、まずインバウンドが激増しています。しばらくこの勢いは止まることがないだろうと私も思っています。ニワトリか卵かというところはあるのですが、それを受けての政府の政策レベルでの観光に対する期待、政策支援というのも間違いなく今後とも続くと思います。また、それと併せて 2020 年東京オリンピックの開催に向けての、スポーツという言葉に対する関心の高さ、政策支援、昨年のスポーツ庁新設もそうですが、スポーツというキーワードに関する政策支援、気運というのも非常に盛り上がっています。

そういう意味では間違いなく今回のテーマであるスポーツ・コンベンション、観光を含めての MICE への期待ないしはいろんな意味での政策支援の問題というのは、間違いなく追い風が吹いてきている事は事実だろうと思っています。但し、先ほどのパネルのところでもちょっと気になったのは、ある面では地方間競争、地域間競争の要素が間違いなくあることです。施設が老朽化していく中で、全ての施設が予算化できるとも限らない中で、今日来られている方が地域の中でどういう役割で MICE の存在と価値を地域の中で共有できるかによって老朽化とともに役割を終えていく所もあるかもしれないし、新たな全く新しい MICE として浮かび上がる所、ないしはさらに浮上する所もあるかなど。いわゆる健全な競争というのが MICE 分野でも起こっているかなど。少子高齢化というとんでもない逆風の中で観光、特にインバウンドを含めた観光、それからスポーツという流れの追い風の中で地域の本当に健全な競争力、総合力を生かした問題が出てくるのかなと感じています。そういう中でこれまでのコンベンション・ビューローであったり、観光に関わっていた方、MICE に関わっていた方たちの役割も少し違った形の部分、まちおこしやまちづくり、地域の産業育成、文化施設としての価値、市民の参画という所まで入っていくべきなんだろうなと感じを持ちました。

私個人の最後のコメントになりますが、間違いなく地域間競争は起こるであろうし、必要であろうし、そのことによって結果的に質の高いものを提供できるようにならなければいけないのですが、この活動が国内だけに留まっては本当にパイの奪い合いになります。ハード、ソフトの質を上げることで、やはり日本という国がこれらの活動を世界に向けて展開できるだけの力をつけ、やっていく中で単なるパイの奪い合いではない、本当に MICE 活動に関わる人たちの喜びであると共に地域への貢献、さらに日本全体への貢献、活性化、我々日本人が日本で

暮らす上での豊かで楽しくて安心な社会を作っていく中で、私も小さいながらひしひしと責任を感じていますが、日本の中で、地域で我々が果たしていかなければならない役割はかなり大きなテーマがあるということを改めて痛感させて頂いた次第です。

非常に駆け足でつたない説明でしたが私の講評を終わらせて頂きます。皆さん、ご参加をありがとうございました。

## [閉会の言葉]

日本コンベンション研究会幹事長

### 藤田 靖



本日は多数ご参加頂きまして誠にありがとうございます。また、このような多くの方々に今回ご参加頂いたことは、まずもって地元岡山の皆様の暖かいおもてなしと、そしてこのコンベンション、MICE に関するご関心の高さを表したすばらしい成果ではないかと思えます。本当に岡山の皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

振り返って我々の歴史を考えてみますと 2006 年に札幌で始まり、ちょうど 10 年目を迎え、今回で 9 回目のフォーラム開催となります。その中で 2011 年の震災直後に静岡でセン

トラルフロリダ大学の原先生に講演を頂きました。その時日本で起きていた状況は震災の悲惨さと JAL の倒産、地方空港の閉鎖などがあり、観光も MICE も終わりとは言いませんが厳しい時代が続くと。原先生が空港は財産だと言われました。いつか空港が日本を復活させる大きな資産になるから今頑張ろうと話されました。まさに、たった 5 年間で日本はインバウンド尽くしになって、我々観光や MICE の分野にとって非常に好景気になりました。その時の研究会で大きなヒントを頂いたわけです。昨日、今日でもまた次の未来に対するいろんなサジェスションや価値、我々の意義といった数々のヒントを頂いたのではないかと考えております。

来年はまた場所を変えて新潟で開催しようと考えております。今回、新潟の方々も多く参加されておりますので、是非壇上においで頂き、PR して頂けたらと思います。

**新潟・加藤** ■ 皆さん大変お疲れ様でございます。昨日も交流会で参加の皆さんにはお話しさせて頂きましたが、2017 年の 3 月 9 日、10 日の木・金曜日の 2 日間、記念すべき第 10 回大会を新潟・朱鷺メッセで開催のご承認を昨日頂きました。私共一同、おもてなしの心をもってお待ちしておりますので、是非ご参加頂きたいと思えます。この日程設定には意味がありまして、翌日 3 月 11 日と 12 日が日本を代表する「にいがた酒の陣」というビッグイベントがありますので、それに合わせて木・金曜日のフォーラムにご参加頂き、もう 1 泊して頂いて、土曜日に酒の陣をお楽しみ頂けたらと思います。今年は過去最高の 12 万 2000 人という来場者記録となりました。今日も女性が数多くお見えですが、私共はおもてなしの心とおいしいお酒、料理、そして救急車も用意しておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

**藤田** ■ それではこれをもちまして本年の日本コンベンション研究会主催のフォーラムを終了いたします。皆さん、来年は是非新潟で会いましょう。



来年3月に新潟フォーラムを控えた新潟メンバー